

標識放流によるマアジの滞留状況

伊藤 靖・三浦 浩(漁村研)・中村憲司・吉田 司(シャトー
海洋調査)

【目的】マアジは年間生産量が20～30万トンにおよぶ多獲性
浮魚類で国民生活に深く関わった重要種である。しかし、成
魚の行動生態の詳細については未だ不明な点が多い。本研究
は、人工魚礁に集まるマアジ成魚の行動特性を把握して、
今後の漁場造成に資する基礎的資料とすることを目的とした。

【方法】本調査では人工魚礁におけるマアジ成魚の滞留期間
や移動経路を把握することを目的に、佐渡島小木翠涌沖の大
型定置網に入網した平成20年6月に計5回、5,000尾のマア
ジ成魚にタグガンを用いて背鰭基部に標識を装着し、放流地
点の対象魚礁まで輸送し、船上から標識魚を放流した。放流
後、佐渡島内における定置網を所有する漁業協同組合および
日本海側の水産試験場に対し、採捕後の報告を依頼した。ま
た、放流後の対象魚礁における滞留状況を把握するために、
放流当日から6日後までの間に、日中複数のダイバーが潜水
し、対象魚礁における標識個体の有無と概数を目視観察した。

【結果】本調査では、人工魚礁に5,000尾のマアジ成魚の放
流を実施した結果、約1%にあたる46尾が2日～62日後に
再捕された。放流魚の約90%は対象魚礁の西側方向へ移動し、
10%は対象魚礁の東側に移動した。放流魚の移動経路には流
況が関与しているものと考えられた。目視観察の結果、対象
魚礁において標識個体は放流当日から2～4日後まで確認さ
れた。また、1日後の出現率は0.3～20%であり、放流魚の
滞留尾数は経過日数とともに減少した。